

第八回 四苦八苦に味わう法の要

N P O免疫療法懇談会理事長酒生文弥

お盆が過ぎ、はや秋のお彼岸。僧侶として折々に法要を勤めさせていただきます。法要は本来、文字通り仏法（ダルマ）の要を縁者が共に味わう催しです。一般には弔いや供養を意味する訳ですが、故人の葬儀や追悼がどうして法要なのでしょう。

約2千5百年の昔、釈迦はこの大宇宙を動かす悠久不変の法則に「目覚められて」ブッダ（覚者）となりました。「偶々目覚めたから説くだけで、私が説こうが説くよいが、ダルマは永久不変の真理」と明言されています。このダルマは、諸行無常と因縁生起という2つの要点から成っています。

諸行無常は、「万物は流転する」（ヘラクレイトス）という真理です。古来、栄華を誇った平家一門が壇ノ浦に滅亡する、といった「亡び」のコンテキストで感得されてきました。しかし、戦後の焼け跡から高度経済成長が生まれたように、物事が生成発展するのも「無常といふこと」です。無常のお陰で、私たちは知的にも経済・社会的にも発展できます。しかし生まれた以上、老いざるを得ませんし、時々病気に罹り、最期は死ぬ。LivingとはAging、折々のAilingであって、大局すればDyingである。確かに、達観すれば「生死一如（Living is dying）」です。しかし、「永遠に若く元気で、死にたくもない」という凡人の執着からすれば、生・老・病・死はすべからず苦しみに違いありません。

因縁生起、略して縁起とは、宇宙の一切の出来事はすべて相互依存して起こる、という真理です。最近の地球的な異常気象は、私たちが「文明」という生態系破壊の縁起を造って来た自業自得です。ヒトは多くの人の間で初めて人間たりえる存在なので、人間関係という縁起にも迷います。嫌な奴に会ったり（怨憎会苦）、欲しくても手に入らなかったり（求不得苦）、元気過ぎて煩惱に悶えたり（五蘊盛苦）します。死んでも自分が自分と別れる訳ではありません（だから来世は大事です）から、自分の死は苦しいことですが悲しくはありません。でも、愛する人と死別するのは、送る人にも逝く本人にも大変な悲しみです（愛別離苦）。

「私という名の船」が、「無常という波浪」に翻弄される4つの苦しみ、「縁起の大海」に彷徨う4つの苦しみ、これを併せて四苦八苦と称します。

あんなに頑固でよく反抗した親父も、老いと病の裡に逝ってしまったなあ（無常）。でも思えば、随分と愛して育ててくれたんだなあ、家屋敷も残してくれたし（縁起）。愛する者と死別して初めて、具体的に分かる仏法の要。それを転がす大いなる慈悲。皆様も、どうか本物の法要をお勤めになって下さい。